

節電の夏をどうお過ごしでしょうか。4年に一度のオリンピックも史上最高のメダル数を獲得し、終わりを告げました。平和旬間が始まりました。原発再稼働問題など、日本が揺れるなか、今こそマリア様の慈愛の御心が届きますようにとの祈りを込めて「タリタ・クム！ 11号」をお届けします。

## ニュース SIGNIS JAPAN 年次総会開催

東京カテドラルの中の関口会館の教区本部会議室にて、5月23日の夕方に幸田司教、晴佐久神父のご出席を得て、2012年度の年次総会を開催しました。千葉会長挨拶のあと、2011年度の活動報告、同会計報告、会計監査報告を承認し、2012年度の活動計画、予算案を承認しました。役員の変更時期に当たり、千葉茂樹会長、土屋至副会長が再選され、町田事務局長が再任されました（3年任期）。その後、SNNの活動報告&会計報告と計画と予算案の説明があり、SNNがハイハイ状態から掴まり立ち状態になったことが確認されました。（町田）

## 「まるでここが天国みたい！」～第36回カトリック映画賞授賞式並びに上映会～

去る5月12日（土）、川崎市アートセンターにて、「第36回日本カトリック映画賞授賞式&上映会」が開催されました。当日は晴天にも恵まれ、200人以上の方が来場。受賞した「エンディングノート」は人生の最期という、ともすると重くなりがちなテーマを、主人公のお嬢様である砂田麻美監督が肉親の眼差しで、温かく軽妙に描いた作品です。上映中、客席から笑いがもれる一場面も。上映後の監督と晴佐久神父との対談では、「お父様は自分から洗礼を受けたいと言いだしたのですか？」など、カトリック映画賞ならではの話をうかがうことができました。「監督とこのすばらしい映画を、今日ここで分かち合うことができ、映画の中の言葉ではありませんが『まるでここが天国みたい！』ですね」という晴佐久神父の最後の言葉がぴったりな一日でした。現在、来年の選考に向けて、今年公開の日本映画をリサーチ中。来年のカトリック映画賞もご期待ください！（山田）



砂田監督と晴佐久神父の対談

今年、来年の選考に向けて、今年公開の日本映画をリサーチ中。来年のカトリック映画賞もご期待ください！（山田）

## 今年のシグニス・アジア会議はマレーシアで開催

今年のシグニス・アジア会議はマレーシアのクアラルンプールで10月1日～5日まで開催されます。2日間はビジネス・デーで活動報告、決算・予算の承認、プロジェクト申請推薦額の承認のほか、各国の活動内容や計画が発表されます。3～4日目はスタディー・デーでテーマは「平和の文化の為のメディア活用：新世代の創造性つつつながる」、サブテーマは「弱いものに目を向ける：人身売買／移民労働者／難民」日本にはなんじみの薄いテーマですが、アジアでは深刻な問題です。5日目は現地事情の視察とシグニスアジア賞の発表があります。日本からは林里江子さんが出席します。（町田）

## お勧め映画紹介 死刑弁護人

杉野希都

カトリック教会は死刑に反対している。では、死刑反対派として声をあげる人はどうか？ 一部の有識者、団体からの反対声明は発表されているが、信徒からの目立った動きはあまり見られないように思う。その理由の一つとして、隠されてきた現実、マスコミによる情報操作により、一人ひとりが死刑について考える「きっかけ」を奪われている事が大きな要因としてあるだろう。

この映画は、そんな「きっかけ」を強く人々に与えてくれる作品だ。オウム事件、和歌山カレー事件、光母子殺害事件など、多くの死刑事件を抱える安田好弘弁護士を追うことで、私たちが垣間見ることができない「死刑」の本質へ迫っていく。そこで一貫して描かれているのは、事件の原因をすべて加害者個人のものとし、そこに至る社会的背景を無視し、社会の問題や事件の憎しみを加害者に背負わせ、抹消することでその場の解決をはかる「死刑」というものが、いかに残酷で意味のないことかという現実だ。安田氏が失われていく命について、語っている慟哭は、弁護士という職業故のものというよりも、私たちの「無関心」が生む現実を背負っているようにみえる。

この映画のトークショーを観覧してきたが、他の登壇者が死刑制度反対の動機を、犯罪抑止力の無さなど統計上で話す中、安田氏は被害者遺族と加害者の間に起きた「赦し」をみた自身の体験を、「弁護士をやってきた良かったと思えた」と動機として話した。それには感動した。「赦し」の体験を胸に闘う安田氏の姿は、ある意味クリスチャンよりもクリスチャンらしいのではないだろうか。

「無関心」により、知らずしらずのうちにどうしても誰かを傷つけてしまう私たちだが、向き合うことのできる一つの「きっかけ」が、この映画にはある。



斎藤潤一監督/2011年

## あの日を忘れなれ - 東日本大震災

### 今、求められている心に寄り添う支援

岩井 誠

東日本大震災から1年3か月が過ぎた。わが家の周辺(仙台市若林区)では、アパートや一戸建ての家などが取り壊されて、平地のまま残された土地があちこちに見られる。町の景観がずいぶん変わってしまった。

いまだに宮城県沖、福島県沖を震源とする地震がほぼ毎日起こっている。震度は1~3ぐらいでほとんど気がつかないものもあるが、グラッと来ると、また大地震になりはしないかと思わず身構えてしまう。

私の所属する一本杉教会は、市内の豊屋丁教会・西仙台教会と合同で、若林区の沿岸で津波被害に遭った方々が暮らす「荒井東通仮設」(約200世帯)の集会所に毎週水曜日の午後訪問し、コーヒーやお茶を提供して、ゆったりくつろいでいただき、たわいのないおしゃべりのお相手をしている。

心のケアと、被災者の自立に少しでもお手伝いできたらと思い、被災者の心に寄り添う支援活動はこれからも長く続けていこうと思っている。

昨年の仙台七夕に合わせて仮設の方々とともに七夕飾りを作り、たいへん喜んでいただいたので、今年も七夕作りをしようと準備を進めている。

6月11日から13日まで日本司教協議会主催で、仙台教区復興支援第2回全国担当者会議が開催され、最終日に元寺小路教会でシンポジウムが行われた。ここで、被災地の現状、被災者支援の課題などが報告された。高齢者が

孤独から認知症になる。生活の見通しがたたず、生きる力が薄れていく。子どもの心の傷、子どもを育てている母親も心の深いところで傷ついている。外国人へのサポート。障害を持った人の支援。ボランティアや支援者にも癒しの場が必要等々課題はつきない。

復興への鈍音が聞かれる中、まだまだ人の心は癒えていない。

被災地を「風化」させることなく、息の長い支援が必要だ。

キリストの愛を見えるかたちで被災者に届けるのは私たちに課せられた使命である。(仙台中央地区広報委員、カトリック一本杉教会所属)



仮設でコーヒーサービスをするスタッフ



仮設でのクリスマスパーティー



昨年の七夕飾り

### 会員紹介

#### 神様のご手配に感謝

パウロ町田雅昭

7年前にはまったく知らなかったシグニスの世界。いま考えると、すべては神様のご手配だったように思えます。アメリカ駐在中に何の気もなしにテレビのチャンネルを廻し、ちょっとおもしろそうな宗教の番組を放送していたのが、24時間カトリックTV局のEWTN (Eternal Word Television Network)でした。子ども向けから青少年向け、大人向けまであり、ミサ放映、説教、対話、聖書講座、ニュース、ドキュメンタリー、映画、アニメ等々。このEWTNと「心のともしび」と結びつけて日米で番組交換できたらというのが、最初の思いでした。

帰国後に「心のともしび」の近藤神父様にお会いしましたが、TV放送打ち切りとのことで、調布教会の主任司祭に相談、中央協広報を紹介され、中央協広報を訪問したら、シグニスのインターネットセミナーを紹介され、セミナーに出たら、会員募集のパンフを渡され、そのまま会員申し込みをしました。2006年の春のことでした。

ちょうどその時にシグニス・アジア会議を日本でという要請があり、おもしろそうということで、その開催準備・運営に当たったら、アジアのカトリックの仲間の努力と働きが見え、多くの友人を得ることができました。私にとってはシグニスは世界とつながる双方向の橋であり、多くの刺激を得、少しでも日本を発信する場です。おかげさまで、ビジネスの世界とは違う、別の世界を今見えています。神様と皆さまに感謝です。(カトリック調布教会所属)

